

東京市

宇田川新太郎様

軍事郵便



東京

宇田川新太郎

お前

お前様 御褒め下さりまして、お褒めしの御返りも、

小生も相褒め下さり、ええお褒めです。各物も送って下さる

毛織、やう上下一着

茶色、千ヨツキ

出来たらアゲモノ

石印、預貯金、一冊

小色、日金、中、これね、ふい、やうに、包、封、装、して、送、て、下、さ、い

一打、三、部

おと殿

東京都

宇田川新右衛門様

軍事郵便

検閲済

和

減

佐世保局第付少五七三〇号  
宇田川新右衛門

相好

船からく渡り河原の舟にありまゝたか

舟の後流に流す舟お乗りもななく無々

即健婦よりお乗りとのと吉原舟

舟りまゝ私もお落し舟お乗り舟

仇敵米鬼撃平殺に全力を注ぎ舟りまゝ

先般は思ひも依りぬ舟に帆を掛けまゝ

か有難く相好舟にまゝを請ふ申す

舟りまゝ

最近舟方より舟無き舟に舟りまゝ

か此舟の舟近況にも船りまゝ橋する

舟りまゝ舟の舟起舟舟舟りまゝ

舟りまゝ決戦の舟寸暇も大舟に舟りまゝ

舟りまゝが良舟折を得舟舟一報お願ひ

舟りまゝ

早々

舟りまゝ

舟りまゝ舟りまゝ

東京市

宇田川新太郎様

半事郵便



軍艦武藏

宇田川新太郎

前略

大妻の中無沙汰致ししより一たび

中雨親ほど先づ一統お妻りもなご

急々の中催縁までお妻りへの趣き請ふ

同慶のまゝに存じしるす 私も

お蔭を蒙り於妻とぞぐえと累で中在事公よ

道進致ししとたりまゝなごら何卒し心配なご

家事に中励みいさしなごあぐや 中致致し

かゝり

内地に終りしより一たび毎に好きに書きたり

ふり種々お忙が  
くふまゝのしく  
是は紫紋、しゅん

ふららはは古割海の強い日光の中にも  
なまを働いて丹りまゝのついで内地の赤  
赤が一寸想像まゝのわあす

たやには春の柳子なぞ知らせて下さ  
此方へ家からなる而してまた珍らしいもの  
送て頂き而して禮も致しませんで申  
あやしくふのしく思ふゆゑにふら  
た悪うらぶ

では仰一読吳々も仰ら自愛き之に  
仰働きおさへ

別はこれと申しし書おく事  
有りたせ

が仰無きものを競わんがに

姉妹達に宣教仰  
信入らさへ

信者

新三郎

宛仰一読様



鐵  
軍形武苑  
之平白川社之印

東京市  
田川新太郎様  
軍事郵便  
檢閱済

前略

中便り有難く相見致しおりました

於夏うが活々存 あれ氣で仰るるの由

仰同慶の到りと存ぞ 丹りまゝ、私もお蔭で元氣で

艦務に渾身の男力を盡し、丹りまゝ

光蔭矣の如く、か日月の過つは早いものであね

今年も後録す、なまゝ、あつた、いふ、いふ、い

お前柄、皆様もお忙か、いふ事、でせう

翁心、新仕、完も完成、いふ、いふ、いふ、いふ、い

あがつた事、でせう、せし、いふ、いふ、いふ、いふ、い

父も仰る、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、い

すあ、元氣、養生、いふ、永生、いふ、いふ、いふ、いふ、い

私もあんなにかかりやうから

内山の兄も近々中々に歸還するやうですが

目出度うにも申しませうか、而して兄は獨身ではあ

れ、妻子も有るものだから歸れば、毎事を歸したとは

思つて居る合と早いのぞ、あね、松が入園するを伺

も、よく兄は召されて行つたがもう三年餘りも過

ぎてしまつたのぞ、あね

兄に比べれば私もあんなに苦しいや、あ文さんや

あ母様も元其のつもりが、あね、とどきれば生死あんな

に、よくも思つて居るや、あね、海に召された命

だものだから他の人は武運長久を祈るや、あね、

私は武運短久を祈る事、祈つて居るや、あね、

あね、

最近師はすつかりよしくありましたから此水から  
また大いに頑張りまわ  
ゆふ親はゆふ一日稼向冬の新から  
ゆふも書きたるに

ゆふ

社...あ

ゆ一日稼

封

16  
11  
16  
16  
176

下  
肥

横須賀海兵衛  
守田川新太郎様



東京市

守田川新太郎様

一筆啓上

一兩毎に暖氣が増して大變良し時夜較とふりす  
其の後者様お褒り座居まらんかお伺申す  
私も相褒らう元氣で一息軍務に励んで居ります  
から何卒一息安心下さい

さて先日おたずねにふりすした小包今日陸奥より  
届てもうございした大變結好する物とたごさん誠に有  
難さうと心盡し有難くお褒りしました今頃の品物  
のふい時にさぞ苦心してさがし求めたるのでしう先月  
二十日また陸奥に居た時牛紙を頂きすたが其れから  
半月以上もかりましたたがこれで二つ共無事一落千丈に  
なりました事お褒り申す上す

No. 1

イカリ

家では今頃は時節がら東京の盛盛りまた春物の  
しつけでも敏系忙のりとお察しす  
私もいつも忙しい軍務のかたは今日の仕事が終り寢床  
に就いた時ふと家では今頃ふたとして居るかしら父は  
元氣で居るか母は達者であらうか兄さんは相褒らす  
忙しく働いて居るがあらうか子供達は大さくふつと  
ろうなああと一人家の様子も思ひ浮かべては皆んふの  
幸福で居て呉れよううに祈り申す

No. 2

イカリ

さて私の事も皆んふは全じやうに心配致して居て下  
さる事ぞしうが私の事は心配しなす下さい私も海軍  
人です父の兄さんの弟であり皆んふの兄さんです  
今度の海戦にも参加出来ず皆んふもさぞどかしと  
田心で居らうござしうが私にもいつか其の時が来ることぞ  
あちう今私にして居ることは皆んふにもお話して

喜こんでもらいたいがこれは軍極秘でたとえ親兄妹  
にも話す事は出来ませんやがてお話しして喜こんで  
頂く時もあることだろう。これに同封致す馬と真  
は最近映した写真真です顔はずいぶん元氣な後  
切つた處と兩腕に桜の花のあることを見ても異いた  
い。暇があつたら度々お便を下さい  
では此の様に元氣よう

兄上様

長崎造船所

弟下り

長崎市館浦海軍監獄官事務所  
有馬大佐事務所第十號室

年々川 杜三郎  
イカリ


十月九日

宇田川秋三郎

封

東京市

宇田川新太郎様





外 畧

船りく出せ音 録 ましはが  
其の後以面脱けめ皆の様以度、  
登々以連係、以消光のりし市連葉  
申しとげまや 不肖、私もお度ら  
至極元と未だ、於務の精勵録、  
ますから、以安心、  
吾々海上有りては、秋の様子も一向に知るる  
も出来、  
ずいなるや、  
想當木の、  
色

農家ヲ於ては、  
乃、  
わすか、  
あまり、  
のふ、  
です、  
先、  
と云、  
さす、  
た、

さて松も今田浅草に能く身を以て  
進取の思今に浴しまし  
十月一日附と優者ふく成續と次で一等水共  
とありまし  
ますては此日々様以自愛す一に

三十一

十月八日

松三郎

字田川 様

X

軍部  
正門

辛酉年  
正月三日

軍事郵便  
檢閱濟



宇田川  
新右衛門  
様

東京市

相成つ  
其後少くも同様 お慶を素く為す 此元氣を  
此起る所の存 あり

此の由縁を 甚なり 至極之氣を 是等勢に 勵んで  
存り 是れは 何年 此等心 下り 老の 由 送り 下り  
す 此等物 は 過る 利 是等 是れ 十 三日に  
業 送 給 是れ かの ものは 今 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ  
存 存り 是れ

此の由縁を 甚なり 至極之氣を 是等勢に 勵んで  
存り 是れは 何年 此等心 下り 老の 由 送り 下り  
す 此等物 は 過る 利 是等 是れ 十 三日に  
業 送 給 是れ かの ものは 今 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ  
存 存り 是れ

イカリ

母に 附

事であるう 小生は 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
長く 武道の 名 是れ 如何に ても 祈り 存り 決意 であり  
す 是れ 深き 由 此等 には 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
す 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても

先の海を 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
下り 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
も 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても

若し 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
下り 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても  
も 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても

此等 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても 是れ 如何に ても

イカリ